

国内各社が有機ELテレビ販売へ

◆ソニーなどが有機ELテレビ販売へ、パネルはLGから調達

2017年5月8日、ソニーは6月から4K有機ELテレビ（OLED-TV）を国内で販売すると発表した。パネルは韓国LGディスプレイから調達する。ソニーは07年に11型パネルを自社開発し、OLED-TVを世界で初めて販売したことで知られる。当時は蒸着によりRGB（Red、Green、Blue）を塗り分ける方式で、コスト的には合わなくても世界で初めて市場に出すことに意味があり、売値を20万円に抑えた。

今のLGのパネルは全面白色発光で、液晶パネル同様カラーフィルターによりフルカラー化する方式である。塗り分けの必要がなく、工程が簡単で良品率が高く量産が可能になった。過去にはサムスンやパナソニックがRGB塗り分けの55型などの大型パネルを開発し、展示会発表などしたが、結局、量産技術の完成に至らず撤退した。パナソニックもLGからOLEDパネルを調達し、欧州に次いで国内でも販売する。プラズマテレビやOLED-TVの自発光型は、液晶に比べ高速駆動や黒色表示などの高画質が特徴でスポーツや映画用に適す。東京オリンピックに合わせ、同社は撤退したプラズマからの買い替えを期待しているようだ。

◆各社音響などの性能で差別化に工夫も、市場拡大には課題も

各社がOLED-TVに参入するが、パネルはLGの独占供給のため画質での差は出しにくい。ソニーはOLEDパネルが薄く振動しやすいことを利用して、パネル自体をスピーカーにして額縁を小さくした。パナソニックは高級オーディオ「テクニクス」の技術を使用し音響面で他社と差別化している。本家のLGや、東芝なども含めユーザーの選択肢は増えてきたが、現状はTV全体の中では金額でも1%未満とまだ小さい。現在のOLED-TVの価格は型当たり1万円以上で、市場拡大には、さらに価格ダウンが必要だがパネル供給が1社では競争が働かない。

5月、JOLEDは20型程度の中型で、印刷による塗り分け方式のOLED-TVの技術を確立し、医療用モニタなどへの展開を発表した。コストは蒸着法より2～3割下がるという。同社は最初中型で技術を磨き、いずれは大型テレビ分野に展開したいとのことだ。普及には競争による技術革新、進歩が欠かせない。 【松田英樹】